挨拶

学長　望月日滋

御先代望月日雄上人の突然の御遷化に、驚愕している暇も無く後任法主の推薦を受けて図らずも乏しき身を以て第八十八世の猊座に就くこととなり、同時に本学々長に就任致しました。

私も身延に生れ、長じて望月日謙上人の御自坊たる日暮里善性寺に寄寓して上人の薫陶を受け、更に亦昭和七年四月より本学の前身祖山学院に教鞭を取り翌八年十二月迄在任しました。四十余年後の今日、日謙、日静、日雄上人等御恩厚い方々の後を承け、本学の学長としての立場を顧る時、責務の重大なることを痛感致します。

日謙上人が特に法器の育成に就いて尽力なされたことは信行道場の開設を挙げるまでも無いことでありますが、続いて日静、日雄両上人亦御師父の遺志を継ぎ画竜点睛の実を挙げ、立正大学、身延山大学共々施設の充実に多大の御骨折りをなされました。

興学布教は宗門にとって大切なことは改めて述べるまでも無いことで、宗祖は「我が門下は夜は眠を断ち、昼は暇を止めて之を案ぜよ、一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ」（定本一三七三）又「行学の二道をはげみ候べし。行学たへなば仏法はあるべからず。我もいたし人をも教化候へ」（定本七二九頁）とも誡められています。日静、日雄

両上人代に祖山の師徒永年待望の校舎、体育館、行学寮等の立派な学舎が建設されたが、曾て私が在任当時の校舎は非常に質素否貧弱なものであった。今日本学に学ぶ諸子は先師の御法労に対し深謝せねばならぬ、同時にその施設は乏しかったが、当時の祖山学院が宗門教学の発展と、法器人材の育成に寄与せんとする潑剌たる意気に燃えて、立派な人々を多数輩出し、今日宗門の第一線に於て活動していることを忘れてはならないと思います。

祖山の環境は法器の育成には最高の地であると確信致します。此処に在って諸子は宗祖当年の御生活を偲び、螢雪、鑽仰、怠慢無く精進致されんことを希求して息みません。

学園の各般に亘って眺むる時、勿論現状を以て完璧なりとは申せません。例せば第一番に図書館の充実を期すること、其他幾多の事項が数へられますが、私は夫々関係者と協議し歩一歩の前進に努め、以て宗祖御入滅第七百年報恩事業に計画の諸建築物の造立と併せて、所謂、物心両面に亘る御報恩記念事業の遂行に努力致す所存であります。切に各位の御協力を懇請して挨拶と致します。